

特集

近世のやまと絵

——王朝美の伝統と継承——

Thematic Exhibition
Yamato-e Painting from the 16th–19th Centuries
The Tradition of Imperial Aesthetics

令和5年（2023）

9月5日（火）▶12月3日（日）

東京国立博物館〈本館〉7室、8-2室、特別2室

特集

仏画のなかのやまと絵山水

Thematic Exhibition
Buddhist Paintings with Yamato-e Landscapes

令和5年（2023）

9月20日（水）▶12月3日（日）

東京国立博物館〈本館〉3-1、3-2室

平安時代初め頃に成立したやまと絵は、以後さまざまな変化を遂げながら描き継がれてきました。今回の特集では、二つの切り口からやまと絵を見ていきます。一つは、古代・中世の仏画などに描かれたやまと絵的な表現です。もう一つは、近世において展開したさまざまなやまと絵です。特別展「やまと絵——受け継がれる王朝の美——」とあわせて、やまと絵の描く世界の広がりを感じていただければ幸いです。



特集 仏画のなかのやまと絵山水

特集 近世のやまと絵——王朝美の伝統と継承—— 執筆：土屋貴裕、古川攝一 翻訳：ミウオシュ・ヴォズニ

令和5年（2023）9月5日発行 撮影：藤瀬雄輔、吉岡由哲ほか（以上、東京国立博物館） デザイン・制作・印刷：アイワード
編集・発行：東京国立博物館 ©2023 東京国立博物館 Tokyo National Museum

表紙作品

右：平等院鳳凰堂壁画（模本）上品下生図 部分
左：武蔵野図屏風 部分

近世のやまと絵

王朝美の伝統と継承

日本の四季の景物や人びとの営み、さまざまな物語などを主題とするやまと絵は、それぞれの時代の好尚を反映させ、連綿と描き継がれてきました。本特集では、古代・中世やまと絵の伝統を継承しながらも、新たな美意識に支えられ、洗練された表現を達成した近世やまと絵、および関連する書跡作品を紹介します。

本特集は大きく三つの章に分け、近世やまと絵の魅力に迫ります。「やまと絵の系譜——四季の景物、名所の情景——」では、やまと絵の大きな主題でもある四季絵や名所絵をテーマとする優品を紹介します。「近世やまと絵の担い手たち」では、土佐派、住吉派、板谷派といった近世やまと絵の画派に加え、近世初期の岩佐派、長谷川派、さらには琳派、狩野派、復古やまと絵の諸派など、画派ごとの表現の流れをご覧ください。「近世やまと絵と宮廷」では、宮廷文化と深くかわる作品や、京都御所ゆかりのやまと絵を紹介します。

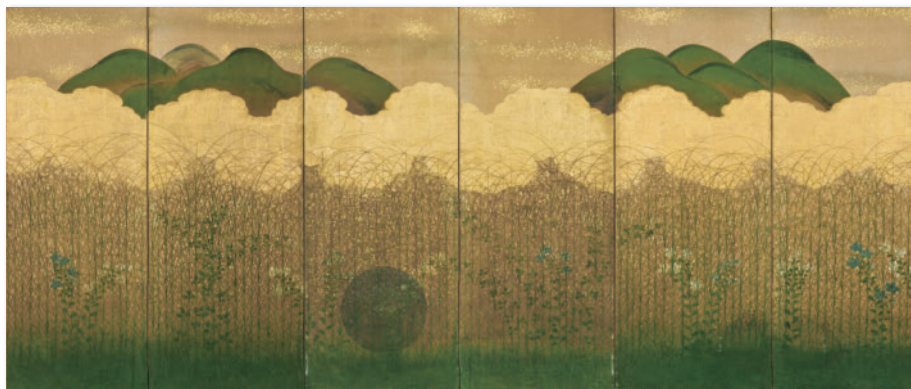
Thematic Exhibition

Yamato-e Painting from the 16th–19th Centuries

The Tradition of Imperial Aesthetics

The term *yamato-e* refers to Japanese-style paintings that were created throughout history, reflecting the tastes of each period. *Yamato-e* depict seasonal scenery, daily life, and scenes from various stories.

Held in conjunction with the special exhibition *Yamato-e: Traditions of Beauty from the Imperial Court*, this exhibition features *yamato-e* created between the 16th and the 19th century. The *yamato-e* of this time combined established traditions with new aesthetic trends, achieving a noticeable refinement. The exhibition also includes related works of calligraphy.



武蔵野図屏風

The Plains of Musashi

6曲1双のうち 紙本金地着色
江戸時代・17世紀 A-1423

武蔵野は東国を代表する和歌の名所の一つ。月、そして薄などが生える広大な野として、とくに秋の景物とからめて詠まれてきた。本作では雄大な富士（表紙参照）の山並と地際の月を対比的に配置する。「月の入るべき嶺もなし」と詠まれたように、月は薄、桔梗などの秋草によって隠されている。名所絵でもあり四季絵でもある、やまと絵が得意とした景物画の系譜を引く作品である。



重要文化財

葛の細道図屏風

Important Cultural Property
The Narrow Ivy Road

深江戸舟筆 6曲1隻 紙本金地着色
江戸時代・18世紀 A-12097

『伊勢物語』第9段、東下りする主人公の男が駿河国の宇津山で知り合いの修験者に会い、都の恋人への手紙を託すという場面。葛の生い茂る狭隘な山道とされる物語の舞台は金地に明るい絵の具で表わされている。これらの景観描写に対し人物描写は、男の視線を都に戻る修験者の背中に向け、東下りする男の寂寥感がより強調されている。深江戸舟は尾形光琳に学んだ絵師。

第1章

やまと絵の系譜——四季の景物、名所の情景——

やまと絵は、四季の移ろい、月ごとの行事、人びとの日々の営み、花鳥、山水など、あらゆる主題を対象とします。なかでも和歌に詠まれた四季折々の景色や自然、各地の名所の様子は、やまと絵で好んで描かれてきました。こうした四季の景物や名所の姿はさまざまな物語でも繰り返し登場し、やまと絵のレパートリーを増やしていきます。ここでは古代・中世のやまと絵の蓄積のうえに成立した、近世やまと絵の王道的主題を描く作品を紹介します。

古代・中世のやまと絵は、宮廷絵所に属する絵師たちによって描かれてきました。近世以降には、さまざまな画派の絵師がやまと絵制作を担うようになります。やまと絵の本流である土佐派、住吉派、板谷派に加え、漢画を主流とした狩野派も積極的にやまと絵に学びます。岩佐派や長谷川派の個性的な作例、抒情性に富んだ琳派の画家たちの作品、江戸時代後期の復古やまと絵の画家たちの濃密な画面。さまざまな絵師たちのやまと絵をお楽しみください。



源氏物語図屏風（総合）

Scene from “A Picture Contest” Chapter of *The Tale of Genji*
狩野（晴川院）養信筆 6曲1双のうち
紙本着色 江戸時代・19世紀 A-12373

『源氏物語』の「総合」から、女御たちが冷泉帝の御前で絵を競う場面を描いている。落款の記載から、養信が法眼位についた文政2年(1819)から天保5年(1834)までの作とわかる。狩野養信(1796～1846)は古画学習をよくした幕末狩野派を代表する木挽町家の画家。本作にも「佐竹本三十六歌仙絵」の図様を転用していることが指摘されている。養信のやまと絵学習の成果が発揮された優品である。



粟穂鶉図屏風

Quail and Millet
土佐光起筆 8曲1双のうち 紙本着色
江戸時代・17世紀 A-12482

穂の垂れた粟をはじめ、桔梗、菊、薄、女郎花などの秋草が生い茂る刈田と、粟の落穂をついばむ鶉の群れを描く屏風。画面なかほどには水辺の景が広がり、画面奥には遠山が望まれる。鶉のふわふわとした羽毛の質感が感じられそうな描写は、草花の幾何学的ともとれるかたちと好対照をなしている。縦が小さいわりに8曲1双という横長の画面は、水辺の小さな動植物を描くのに大変適している。



伊勢物語絵巻 巻第六（部分）

Volume 6 of *The Illustrated Tales of Ise* (Detail)
絵：住吉如慶筆 詞：愛宕通福筆
6巻のうち 紙本着色
江戸時代・17世紀 A-12341

在原業平を主人公とする『伊勢物語』を描いた全6巻の絵巻。『伊勢物語』125段すべての詞書と主要場面の絵で構成されている。各巻の最終段の絵に「住吉法橋如慶筆」の墨書と「広通」の白文方印があり、住吉如慶が描いたことがわかる。江戸時代以前にも伊勢物語絵は作られたが、本作は過去のさまざまな図様を集成し、大胆な新解釈も加えて作られている。伊勢物語絵の一つの到達点を示す作品である。

復古やまと絵

江戸時代後期、土佐派や住吉派の描くやまと絵のあり方に再考を促し、往古のやまと絵に立ち返るべきとの理念をもった画家たちによる作品のことです。



四季花鳥図巻 巻下（部分）

Volume 2 of *Birds and Flowers of the Four Seasons* (Detail)
酒井抱一筆 2巻のうち 絹本着色
江戸時代・文化15年(1818) A-85

春夏で1巻、秋冬で1巻、計2巻にわたり月々の花と鳥たちが描き連ねられ四季がめぐってゆく画卷。左へと巻き広げる構図を最大限に生かし、幹や枝、蔓の配置とともに、鳥や虫たちも次の季節へとリズムカルに視線を誘導させていく。極上の絵の具により描かれた本作は、酒井抱一の琳派学習や江戸時代後期の中国絵画に対する嗜好、博物図譜の流行など、さまざまな要素を取り入れ紡ぎだされた、抒情性あふれる抱一花鳥画の代表作の一つといえる。



伊勢物語 八橋図

Scene from the “Yatsuhashi” Chapter of *The Tales of Ise*
尾形光琳筆 1幅 絹本着色 江戸時代・18世紀 A-345

都から東へと向かう主人公が、都に残した恋人を想い「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と詠う、有名な『伊勢物語』第9段「八橋」の場面。主人公とその従者たちが燕子花を眺めながら、都へと思いを馳せる様子を描いている。屈曲して描かれることの多い橋板を、あえて水平方向にのみあらわすことで、水辺の曲線との対比を印象づける構図となっている。



忠度出陣図

Taira no Tadanori's Departure
冷泉為恭筆 1幅 絹本着色
江戸時代・19世紀 松永安左エ門氏寄贈 A-10583

冷泉為恭は復古やまと絵を代表する絵師。本図は源平合戦のおり、都落ちする平忠度が藤原俊成のもとに立ち寄り、自らの詠んだ和歌を託すという場面。馬上の忠度は若武者姿で、屋内には涙する童子二人と、顔の隠された俊成の姿がある。為恭は多くの絵巻を模写したことで知られ、そうした知識が甲冑などの描写に生かされている。中縁の描表装も為恭によるもので、蝶は平家の紋である。

近世やまと絵と宮廷

平安時代以降、やまと絵は宮廷社会と深く結びつきながら描かれてきました。とくに近世初期には、文化的な営みに積極的にかかわった天皇のもとで、多くのやまと絵が制作されました。寛永の三筆と呼ばれる書流が盛行するのも、こうした時代背景によるものです。また、当館には、江戸時代初めから終わり頃までの京都御所ゆかりの作品も数多く収蔵されています。



和歌屏風

Waka Poems

近衛信尹筆 6曲1双のうち 紙本墨書
安土桃山～江戸時代・17世紀 B-2767

『古今和歌集』や『伊勢物語』『万葉集』などに収められている古歌を、一扇に一首ずつ揮毫して、左下には花押を署している。近衛信尹は、このような大字の書を得意としていたため、勢いのある筆遣いで墨の濃淡や配置に変化をつけていて巧妙である。台紙に描かれた四季の草花と書写された和歌が美しく調和している。



立花図屏風

Flowers in Vases

6曲1双のうち 紙本着色
江戸時代・17世紀 A-1067

京都御所に伝来した屏風。立てた花の様子のみならず、花器の様子もくわしく描く立花図が、合計36図貼り交ぜられている。寛永年間(1624～44)に制作され、池坊専好、後水尾院によるものが含まれるという。後水尾院周辺で制作されたと考えられるが、曼殊院良恕法親王の関与も想定されている。保存状態は必ずしも良好とはいえないが、こうした屏風が宮中での立花の手本となっていたことのわかる貴重な作例である。



大嘗会屏風のうち主基屏風
天明七年度十一月・十二月帖

Poetry and Scenes of the Suki Province for an Emperor's Enthronement Ceremony

土佐光貞・光時筆 6曲1隻 紙本着色
江戸時代・天明7年(1787) A-12459

大嘗会屏風とは、天皇の即位時に行なわれる一代の大祭、大嘗会の際に作られる屏風。東方の悠紀国、西方の主基国から一国を選び、その地の名所を詠んだ和歌を色紙形に記し、その景色が描かれた。この屏風は天明7年に大嘗会を行なった光格天皇の時の大嘗会屏風。おおむね2扇ごとに一場面を描き、十二月の風景や行事を描く月次絵の形式を踏襲している。

仏画のなかの やまと絵山水

やまと絵は、中国由来の「唐絵」や「漢画」の影響を受けてつつ独自の展開を遂げた絵画で、非宗教絵画である世俗画制作をおもに担った宮廷絵師が育んできました。平安時代半ば以降、宮廷絵師と仏画制作を担う絵仏師が協働して絵画制作を行なう環境が増え、仏画のなかに、宮廷絵師の担ったやまと絵の山水表現が取り入れられるようになります。密教絵画、經典説話画、縁起絵などのジャンルによって山水表現との相性には違いがあります。たとえば神仏習合にかかわる作例（垂迹画）や、阿弥陀如来の来迎図では、厳かな仏の姿と穏やかな自然景が見事に融合し、美しい画面が生み出されました。こうした作例は、宮廷絵師が手掛ける山水表現との区別がつかないほど、絵仏師がやまと絵の山水表現を十分に理解し、習熟していたことを物語ります。本特集では仏画に見られる自然の風景、山水表現に注目し、模本も活用しながら、その具体例を紹介します。

Thematic Exhibition

Buddhist Paintings with Yamato-e Landscapes

The painters of the imperial court developed a style called *yamato-e*, or “Pictures of Yamato (Japan).” They adapted techniques from Chinese painting traditions in order to portray Japanese stories, customs, and landscapes.

During the Heian period (794–1192), the court painters began to collaborate with the painters of Buddhist images. As a result, natural scenery painted in the *yamato-e* style was incorporated into images of Buddhist gods, monks, and other figures.

In conjunction with the special exhibition, *Yamato-e: Traditions of Beauty from the Imperial Court*, this exhibition shows how painters elegantly combined Buddhist imagery with *yamato-e* landscapes.



諸尊集会図

Gathering of Gods

1 幅 絹本着色 鎌倉時代・14 世紀 A-11974

釈迦三尊十六善神像や千手観音二十八部衆像、薬師十二神将像、地藏菩薩像、不動明王二童子像など、複数の尊像が自然に溶け込むように描かれる。釈迦三尊の前には烏帽子をかぶった人物、画面の四隅には本図の制作にかかわったとみられる複数の僧侶と尼僧の姿が表わされる。制作背景は不明ながら、画面の構成は穏やかな自然のなかに本地仏を描く垂迹画と共通する。自然を背景に、複数の尊像と人物を一図に再構成した珍しい作例である。



春日本地仏曼荼羅図

The Mandala of the True Buddhist Forms of the Kasuga Gods

1 幅 絹本着色 鎌倉時代・13 世紀 A-106

画面下部には春日山、御蓋山、若草山と神鹿が遊ぶ春日野の風景。画面上部の大きな円相には、春日の神々の本来の姿である本地仏が描かれている。本地仏の描写に力点が置かれるものの、画面下部に描かれる松や杉は大きく、一つ一つを丁寧に描写し、築地塀を部分的に描くことで、春日の神域を象徴的に表わし厳かな雰囲気を出す。剥落が多いものの、樹木や山々は、当初は鮮やかな発色を示し、本地仏の神々しさとあいまって、より一層美しい画面であったことを思わせる。

唐絵、漢画とやまと絵

平安時代から鎌倉時代頃にかけては、中国的な主題を描く唐絵に対し、日本の風景や人物を描く作品を、やまと絵と呼んでいました。その後、水墨画など中国の新しい様式による絵画がもたらされ、それを漢画と呼ぶのに対し、前代までの伝統的なスタイルにもとづく作品をやまと絵というようになりました。やまと絵は唐絵や漢画といった外来美術の理念や技法との交渉を繰り返しながら、独自の発展をとげていきました。



国宝 十六羅漢像（第七尊者）

National Treasure The Seventh of the Sixteen Arhats

1 幅 絹本着色 平安時代・11 世紀 A-10946

右の第十五尊者とともに、滋賀・聖衆来迎寺に伝来した現存最古の十六羅漢図。中国、唐時代に描かれた羅漢図を手本にしたと考えられるが、明るい色調で整えられた優美な彩色、柔らかな輪郭線が生み出す温和な雰囲気には、11 世紀を生きた平安貴族の美意識が反映されている。当時のやまと絵を知る手がかりとなる作例。



国宝 十六羅漢像（第十五尊者）

National Treasure The Fifteenth of the Sixteen Arhats

1 幅 絹本着色 平安時代・11 世紀 A-11085

羅漢のいる建物の外には山水が描かれる。小さな滝の流れる岩山は、輪郭線が柔らかく、美しい緑の彩色とともに穏やかな印象を与える。画面右上には色紙形と呼ばれる区画があり、羅漢について記され、その下地の模様として描かれた花鳥図も繊細で愛らしく、本作品の見所の一つである。



阿弥陀聖衆来迎図

The Descent of the Buddha Amida with Divine Attendants

1 幅 絹本着色 鎌倉時代・14 世紀 A-11974

阿弥陀如来が多くの菩薩を従えて極楽浄土から臨終の場を迎えにくる様子を描く。桜が満開の美しい自然を背景に、画面右下の家屋には、南無阿弥陀仏と唱えつつ、その来迎を願う人物が描かれる。大きな画面のなかで、仏の姿と美しい自然景が見事に融合する。上に挙げた「諸尊集会図」とともに一対として、後鳥羽上皇を祀る大阪・水無瀬神宮に伝来したという。

日本の風景に由来するやまと絵の山水は、仏の世界を彩る背景として仏画に取り入れられました。釈迦の教えを守り伝える聖者を描いた国宝「十六羅漢像」に見られる明るい彩色と柔らかな描線は、優雅で上品な雰囲気漂わせ、平安貴族の美意識を反映しています。また、奈良・春日大社にかかわる作例に代表される「垂迹画（神仏習合の仏画）」や、臨終の際に往生者のもとにやってくる阿弥陀如来と諸菩薩を描いた「来迎図」は、背景に自然景を描くもので、やまと絵山水と親和性が高い作例です。

平等院鳳凰堂扉絵 模本

— 平安時代のやまと絵山水 —

十円硬貨のデザインでも著名な、京都府宇治市の平等院鳳凰堂は、天喜元年（一〇五三）、藤原頼通によって建てられました。本尊、阿弥陀如来像の安置される鳳凰堂の扉には、九品来迎図（阿弥陀がこの世に現れる九つの様相）が描かれています。そこには、身近な四季の景色を取り込んだ日本の風景が描かれており、平安時代のやまと絵の姿を今に伝えます。江戸時代後期、田中訥言が写した鳳凰堂扉絵の模本から、平安時代のやまと絵山水を探ってみましょう。



日想観図（配置図⑩）



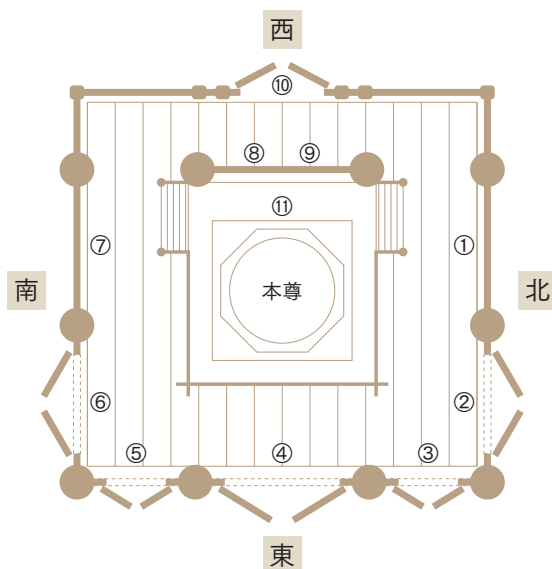
上品下生図（配置図⑤）



中品上生図（配置図②）

平等院鳳凰堂扉絵と
四季の風景

平等院鳳凰堂内部の四面の扉には九品来迎図が描かれています。本図は来迎とともに日本の四季の景色が描き出されているのが大きな特徴です。阿弥陀如来に向かつて右手、北面に春、東面に夏、南面に秋、西面に冬を配し、四季の循環が意識されています。方位と四季を組み合わせた中国の思想を踏まえ、穏やかで美しい日本の風景のなかに阿弥陀の来迎を描いています。



鳳凰堂扉絵壁画配置図

- ① 中品中生図
- ② 中品上生図
- ③ 上品中生図
- ④ 上品上生図
- ⑤ 上品下生図
- ⑥ 下品上生図
- ⑦ 下品中生図
- ⑧ 下品下生図
- ⑨ 中品下生図
- ⑩ 日想観図
- ⑪ 阿弥陀供養図

平等院鳳凰堂壁画（模本）

Wall Painting in the Phoenix Hall of Byōdōin Temple (Copy)

田中訥言模 15 枚のうち 紙本着色 江戸時代・19 世紀 A-1521
 原本：平安時代・11 世紀 平等院蔵